

市史講座第5回ミニレポート

8月11日(土)第5回の講座が開かれました。

第1部：「松江に人が住み始めた頃—氷河時代を生き抜く戦略—」(講師:島根県古代文化センター長 丹羽野 裕 先生)



丹羽野先生は、まず、松江に人が住み始めた頃の旧石器時代の人々も現代に生きる我々も「ホモ・サピエンス」であり基本的には変わらないこと、旧石器時代はいわゆる氷河時代で海水面が現在より低く宍道湖・中海は存在しなかったこと、旧石器人は遊動生活をしていたことなどをお話しされました。

そのうえで、松江市内は旧石器時代の遺跡が集中する地域の一つであり、それは石器の石材となる玉髓を産出する玉湯町の花仙山が主要な石器石材産出地(隠岐の黒曜石など)の間にあり遊動生活における貴重な補完石材の役割を果たしたことや、現在の矢田渡付近が中国山地から隠岐に向かう唯一のつながった尾根筋であったことから、松江市内が遊動生活の主要なルート上に位置したためではないかとお話しされました。

第2部：「室町時代の出雲守護と分国支配」(講師:愛媛大学教授 川岡 勉 先生)



川岡先生は、室町時代の出雲国守護京極氏について重視するポイントとして、1.京極氏の歩みを幕府—守護体制と関連づけて捉え、その枠組みがもたらす作用をきちんと位置づけること。2.権力内部の動きが外部の動きと連動する側面に目を向けること。3.京極氏の分国支配を一体的に捉える(出雲・近江・隠岐・飛騨との有機的関連性)4.戦国大名論に基づく京極氏に対する消極的評価を克服する。この4点をキーワードとし、守護京極氏の出雲支配について述べられました。

室町幕府における京極氏の地位について、京都での経済力と軍事的な面を説明され、次に将軍義教暗殺に巻き込まれ急死した当主の跡を継いだ、持清による京極氏の分国支配の強化について取り上げられました。応仁の乱では、京極氏の活躍と一族の分裂についての状況を

述べられています。乱後、守護代尼子氏の優位な形に室町幕府守護体制が再編され、尼子氏は京極氏から出雲・隠岐守護職を相続されたとの認識がなされたと説明されています。この講座では、尼子氏に比べて知られていない京極氏の事蹟を詳しく紹介されています。